

読書会という幸福

読書会潜入ルポ

②猫町倶楽部



むかい・かずみ 翻訳家・中高
一貫校の図書館司書、早稲田大学
第一文学部卒業

向井和美

世界 SEKAI 2020.5

二〇〇六年にビジネス書を読む会として名古屋で始まった読書会。その後、開催拠点は東京、大阪など全国五都市に拡大した。文学をテーマにした読書会のほか、ビジネス書を取り上げる「アウトプット勉強会」や映画を観て語り合う「シネマテーブル」、哲学書を読む「フィロソフィア」などの分科会がある。作者を招いて開かれる特別な会は募集定員がすぐに埋まるほど人気があり、ほかにもクリスマスパーティーなどのイベントが開かれる。今では全体で年間二〇〇回も開催され、一年間のべ参加人数は九〇

〇〇人という「日本最大の読書会」である。開催スケジュールはウェブにアップされているので、参加者は自分の都合のよい日時や読みたい課題本の回を選ぶことができる。選書はほぼすべて主催者が行ない、ベテラン参加者がサポーターとなって各分科会を運営している。

メディアでよく取り上げられるので、わたしもだいぶ前から知っており、一度は参加してみたいと思っていた。どうせなら自分では手に取らない作品の回にしたい。申し込んだのは「東京文学サロン月曜会」（参加費は読書会二〇〇〇円、懇親会四〇〇〇円）で、課題本はマヌエル・プイグの『蜘蛛女のキス』（野谷文昭訳・集英社文庫）。

課題本にちなんだドレスコードが、一種のお遊びとして設定されている。今回は「ストライプかジェンダーレス」だったので、わたしはストライプ柄の入ったセーターを着ていった。

ラテンアメリカ文学はこれまでガルシア・マルケスやガブリエル・バスケスクらしいしか読んだことがなく、プイグは初めてだ。ラテンアメリカ文学というと、土着的、幻想的で作品のなかに引きずり込まれるようなイメージを持っていたが、『蜘蛛女のキス』は都会的で乾いた印象である。



大人数での読書会は壮観。筆者撮影

地の文はなく、ほぼふたりの会話だけで成り立っている。冒頭から、正体不明の人物が映画のストーリーを事細かに語り、もうひとりがそれを聞いている場面が長く続く。このふたりがどういう関係でどこにいるのかもわからず、読んでいて戸惑ったが、やがてアルゼンチンの刑務所で同室となった同性愛者のモリーナと革命家のバレンティンが語り合っているのだとわかってくる。なんとも不思議で独特の魅力を感じるものの、どう解釈したらいいのか迷う部分も少なくない。だから読書会で意見を聞けるのが楽しみだった。

広いレストランを貸し切った会場にはテーブルが一〇ほどあり、参加者は受付をすませると、そのどこかに割り当てられる。それぞれのテーブルには五〜八人が座っていた。

う疑問には、ベテラン参加者の男性がこう答えた。「六つの映画の内容それぞれが、ふたりの関係に微妙に関わっているからではないか」。別の男性は「映画を語るその行間から、語られていないふたりのしぐさや感情の揺れが見えてくる」と鋭い発言をした。同性愛についての長い原注は本文とは異質な文章で、これはなんのためなのかと話題になった。読書家らしい男性が答える。「もしかしたら、客観的な解説が原注で、同性愛者と異性愛者を同室に入れておいたらどうなるかというケーススタディが本文なのでは」。なるほど、そんなふうにも考えられるのかと全員がうなづいた。モリーナが「蜘蛛女」にたとえられているのはなぜか、という疑問も出た。蜘蛛女といえば悪女のイメージだが、愛情深いモリーナは全然違っているからだ。四〇代くらいの女性が発言する。「蜘蛛が糸を紡ぎ出して昆虫をからめとるように、モリーナは『千夜一夜物語』さながら、映画のストーリーを紡ぎ出すことで、バレンティンを虜にしてみましたということではないか」。なるほど、そうだが、とみな納得の様子。

わたしたちのテーブルは、進行役の出番がないほど活発に意見が飛び交い、まだまだいくらかでも話せそうなほど、あつというまに終わりの時間が来た。二時間じっくり語り合ったあとは、不思議なことと同じテーブルの人たちが仲

この日の参加者は全部で六〇人ほど。男女比は六対四くらいで、年代は三〇代、四〇代がほとんどだ。常連が多いらしく、読書会が始まる前から親しげな挨拶が交わされている。わたしのテーブルには男性五人と女性三人が座った。

まずテーブルごとに進行役を決めたあと、ひとりずつ自己紹介と本の感想を話していく。二〇代くらいのおとなしそうな男性。「濃密な雰囲気作品だ。女だと思っていた人物が実はオネエ言葉のゲイだとわかってびっくりした」。初参加の男性は「シナリオを読んでいる気分になるのは、作者が映画監督をめざしていたからではないか」という意見だった。「この作品には謎の部分が多い」と切り出した女性の言葉に、全員が頷いた。たとえば、モリーナはなぜスパイとしてバレンティンの秘密を探り出す役を与えられたのか。いつから寝返ってバレンティンの味方になったのか。仮釈放されたあと、バレンティンの仲間に接触できたのか。なぜ撃たれて死んだのか。説明がいきい書かれていないのだ。「モリーナはかいがいしくバレンティンの世話をしているうちに、情が移ってしまったのでは」と口にしたのは会社員らしい男性。若い女性参加者は、「過激派組織に撃たれたように思えるが、実は警察に始末されたのかも知れない」と感じたらしい。モリーナが映画のストーリーを語る部分が冗長なほど多くを占めるのはなぜかとい

間に思えてきて、なんだか別れづらく、もつと話したい気分になった。初対面の人とここまで深い話ができるのも、本を媒介にしているからこそだ。ときには本の話を通して、発言者の人生観が垣間見えることもある。だから、同じテーブルの仲間とは心が通じたような気持ちになる。ここから恋が芽生えても不思議はないし、実際に芽生えていくらしい。

ドレスコードに工夫を凝らした「本日のベストドレッサー」が投票で選ばれたあと、懇親会が始まる。ほとんどの参加者がそのまま残っていた。懇親会ではドリンクが飲み放題だが、バイキングで提供される料理はかなり量が少なく、すぐになくなってしまった。参加者たちは本の話に熱中し、お気に入りの作品を紹介し合いながらメモを取っている。その会話を聴いているだけでこちらまでわくわくした。

参加費は少し高めだが、それでもおおぜいの人が集まるのは、やはりみんな顔を合わせて語り合いたいのだろう。本好きがつい、全員がきちんと課題本を読んできて、相手の意見に耳を傾けながら語り合う。それがおもしろくないわけではない。また参加したい気持ちになるのも頷ける。これはもう読書会という名の一大イベントである。